

平成 25 年度

兵庫県立大学 COC 事業

「ひょうご・地(知)の五国豊穰イニシアティブ」
オープニングフォーラム

日時：平成 26 年 2 月 15 日

場所：兵庫県公館（神戸市）

○フォーラム風景



平成 25 年度
兵庫県立大学 COC 事業

「ひょうご・地(知)の五国豊穰イニシアティブ」

オープニングフォーラム

日時：平成 26 年 2 月 15 日

場所：兵庫県公館（神戸市）

次第

第 1 部 「ひょうご・地(知)の五国豊穰イニシアティブ」 オープニングイベント

(1) 主催者あいさつ

清原 正義（兵庫県立大学理事長兼学長）

(2) 大学 COC 事業連携自治体あいさつ

平野 正幸（兵庫県知事公室長）

(3) 兵庫県立大学 COC 事業の紹介

第 2 部 オープンゼミナール

(1) ソーシャルビジネスプランコンペ“edge2014”最終審査プレゼンテーション

(2) パネルディスカッション「社会起業家の時代」

① キーノートプレゼンテーション

今村 久美（認定 NPO 法人 NPO カタリバ代表理事）

② パネルディスカッション

[パネリスト]

・今村 久美（認定 NPO 法人 NPO カタリバ代表理事）

・田村 太郎（NPO 法人 edge 代表理事）

・稲村 和美（尼崎市市長）

・石井 孝一（兵庫県産業労働部長）

・畑 正夫（兵庫県立大学教授）※コーディネーター

閉会式

(1) ソーシャルビジネスプランコンペ“edge2014”審査結果発表・表彰

(2) 閉会挨拶

高坂 誠（兵庫県立大学副学長兼地域創造機構長）

主催者挨拶

兵庫県立大学理事長兼学長 清原 正義

ただ今ご紹介いただきました、兵庫県立大学の理事長兼学長の清原でございます。

本日は、私どもの大学のCOC事業「ひょうご・地（知）の五国豊穰イニシアティブ」オープニングセレモニーということで、オープニングフォーラムを開催することにいたしました。多数の皆様にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。多少雪が心配だったのですが、通り過ぎてくれたようでちょっと風が冷たいようですが、どうかこれから夕方まで長丁場になりますが、よろしく願います。

本日は、非常に多彩な皆様方にご参加いただきましてお礼申し上げたいと思います。NPO法人edgeの田村さん、尼崎市の舟木さん、NPO法人ホームドアの川口さんにはオープンゼミナール第2部でお世話になります。そしてまた、パネルディスカッションにおきましては、NPO法人カタリバの今村さん、先ほど申し上げました田村さん、兵庫県産業労働部長の石井さん、尼崎市長の稲村さんにもお越しいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

わたくしどもの大学には地域創造機構という本部機構がございます。この地域創造機構の専任教員をいただいております畑教授が、今日は全体のコーディネーターをしております。

ところで、このCOC事業は（Center of Communityの略でございます。）今年度から文科省が全国の大学に呼びかけて募り、非常に厳しい競争を経て、全国で50ほどの大学が選ばれました。兵庫県立大学は、兵庫県全体がキャンパスであるという考え方に基づいてCOC事業として6つのプロジェクトを展開し、県下全体を対象として6つのプロジェクトを同時並行で走らすという非常に壮大な構想を打ち出したのは、このCOC事業に採択された大学の中で兵庫県立大学だけです。そういう意味では、全国的にも注目されている、またそれに我々も十分応えなくてはいけない、そういう風に考えております。これからは本日のキックオフフォーラムを皮切りに県下全域でこのようなCOC事業の地域のプロジェクトの展開を図っていきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は、この事業を通じて、各地域の課題を解決する人材を大学が一緒になって育てていく、そしてまたその成果を大学の教育や研究に取り組んでいく、こういう基本的な考え方でこの事業をすすめていきたいと考えております。どうか皆様方のご協力をよろしくお願い申し上げます。

兵庫県立大学はご存じのとおり、6学部・12の大学院研究科が現在ございます。4つの附置研究所、さらに附属高校・中学、非常に多様な内容をもった総合大学ですが、今年の4月豊岡に地域資源マネジメント研究科を新しく開設いたします。13番目の大学院研究科でございます。今回のプロジェクトにおきましても、地域資源系ということで大きな役割を果たしていくわけですが、この地域資源マネジメント研究科では、豊岡のコウノトリの野生復帰事業、また日本海のジオパークを地域資源と捉えて、こうしたコウノトリの野生復帰活動やジオパークによる地域振興を踏まえながら、地域資源マネジメント研究科において地域づくりを担っていく人材を育てるという目的で立ち上げます。学部は6つですが、大学院13を作って大学院の数が多すぎると気がしないでもないですが、これが当県立大の特徴のひとつだということで全力を尽くしたいと考えております。

本日は、ほんとにたくさんの皆様方にご参加いただきまして、また、多彩なゲストをお迎えしてこのキックオフフォーラムを開催できますことを心から喜んでおりますと共に、皆様方に厚くお礼を申し上げまして、わたくしの挨拶とさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

大学 COC 事業連携自治体あいさつ

兵庫県知事公室長 平野 正幸

ただ今ご紹介いただきました、兵庫県知事公室長の平野でございます。

今日は、COC 事業の連携自治体の皆様方大勢ご参加いただいておりますが、代表してご挨拶をということでございますので、お許しをいただきたいと存じます。

兵庫県立大学の COC 事業のオープニングフォーラム、このように、大勢の皆様お集まりのもとで盛大に開催されますこと、まずもってお祝い申し上げます。

先ほど、清原学長から COC 事業につきまして、また県立大学につきましていろいろご説明がございましたので、私から重ねてのお話は避けたいと思っておりますが、私の方から 2 つだけお話をさせていただきますと存じます。

その 1 つは、昨年 4 月公立大学法人として新しくスタートいたしました兵庫県立大学が、その新しく生まれ変わった早速の取組みとして、運営指針となります中期目標の中で定められております、地域に根差し地域の期待に応える大学ということの実践として COC という大きな事業にチャレンジされたということに対し、まず心からの敬意を表したいと存じます。この事業には、先ほどお話がありましたとおり全国から多くの申請があつて、なかなかその際にご苦労があつたと私も関係者として感じております。その中で兵庫県立大学の地域への積極的アプローチの姿勢を示す象徴的な事業として果敢にチャレンジされる心意気というのは非常に感じるものがありまして、改めて敬意を表したいと思います。

2 つ目は、この事業の目指すところに対する期待です。ご存じのとおり、兵庫県は、北は日本海から南は瀬戸内海、太平洋に面し、8,400 平方キロ、非常に広大な県土は、但馬・丹波・播磨・摂津・淡路の 5 つの国から構成され、よく日本の縮図と称されています。その県内の全地域で 6 つのプロジェクトを展開して、大学の「知」と地域の「地」を繋ぎ、さまざまなセクターのみなさんと共同して地域課題の解決への道筋を探るという企画に大きな期待を抱くものであります。この日本の縮図と言われる兵庫で先導的に取り組まれる地域課題の解決に向けたチャレンジの成果は、必ず国内の他の地域における先進モデルになるという意味での期待も大きいと思います。そのような意味で私ども連携自治体といたしましても、地域でさまざまな活動をされている皆さん、あるいは住民の皆さんと一緒に大学「知」を加えた強力なスクラムを組んでこの事業に果敢に取り組ませていただきたいと考えています。

今日はそのキックオフです。ご参加いただいております皆様方にとって有意義なものにしていただきますとともに、これから共にごがんばりましょうということを確認させていただきまして、開会にあたりまして私からの一言のご挨拶とさせていただきます。がんばっていきましょう。

パネルディスカッション

「社会起業家の時代」

[パネリスト]

今村 久美 (認定 NPO 法人 NPO カタリバ代表理事)

田村 太郎 (NPO 法人 edge 代表理事)

稲村 和美 (尼崎市長)

石井 孝一 (兵庫県産業労働部長)

[コーディネーター]

畑 正夫 (兵庫県立大学教授)

○パネルディスカッション「社会起業家の時代」

[パネリスト]

- ・ 今村 久美（認定 NPO 法人 NPO カタリバ代表理事）
- ・ 田村 太郎（NPO 法人 edge 代表理事）
- ・ 稲村 和美（尼崎市長）
- ・ 石井 孝一（兵庫県産業労働部長）
- ・ 畑 正夫（兵庫県立大学教授）※コーディネーター

畑氏 どうもありがとうございます。社会起業家の時代という、ちょっと大それたテーマをつけてみました。私の基本的な仕事というのは、今日のテーマ、兵庫県立大の COC 事業の五国豊穰イニシアティブを進めていくという仕事をさせていただいています。冒頭、学長からも挨拶がありましたように、人材を育てるとというのが今回大きなテーマになっています。これは震災にかかわらず地域の課題に対してどう向かい合っていくかということが大きなテーマです。先ほど edge のオープニングトークの中で田村さんから人材を育てるとということが非常に重要なポイントとして指摘されています。この間、プレゼンターのお話を伺ったり、あるいは、キーノートスピーチをお聞かせいただいているとやはり、人をどう育てていくかということが背景の一番大きなテーマになっているように見えてきました。部分的にトークの中で自己紹介をされているかとは思いますが、改めてもう一度地域の中で人材を育てる、ということテーマに今回お話をしていく中で、御自身の活動を突き動かしている原点ですかね、これは何度もお話しされている方はむしろその活動を突き動かしている原点をどう守り育て来たか、そのあたりを少し御紹介いただきながら、パネラーのそれぞれの背景、共通基盤を少し見ていきたいなと思っています。そういうことで、全て振り返るといってわけではありません。まずは少し振り返ってみて、その上でその振り返りを生かして今後地域にどうかかわっていくかということを考えてみたいと思っています。大体1時間程度ということでおつき合いをいただきたいと思

います。

では、最初に田村さんから順番にお願いしたいと思います。

田村氏 はい、私は振り返りということで先ほど少し触れました、19年前に阪神・淡路大震災があつて、当時私は大阪でフィリピン人向けのレンタルビデオ屋さんをやっていた、日々外国人の人と接していた中で阪神・淡路大震災が起きて、多言語で情報提供をするということで、日本語がわからない人が阪神間に多かったですから、それがきっかけだったので、その後その活動をもとに多文化共生センターをつくって、一方で復興ということにもかかわって、これは神戸復興塾という団体の事務局長もやりました。その後いろんな活動をしてきて、それなりに成果が出せたかなというのもあつて、今度は人を育てる側にも回りたいたいということで、これは職業としてではなくて、僕らがよく仲間と言っているのは道楽として、そこでお金を稼ぐのではなくて仲間を増やそうよということで edge という活動をしてきました。最近では、先ほど紹介していただいたとおり、復興庁の仕事もしています。これは、東日本の震災が起きた後に私が阪神・淡路大震災でこんなことをやっていたというのを知る人がいて、政府に呼ばれて行きました。今日は民間人として来ておりますので、非常勤の立場ですけれども、復興庁の仕事もしています。今、ですから僕は東北には国家公務員の肩書で被災地に出向いて、以前ですと、全く民間人として行きますと民間人として遇されるのでみんなにこにこと話を聞いてく

れるわけですが、国家公務員としてしかも悪名高き復興庁の立場で行きますと、まず殴ってやるぞみたいな顔をされて、全然ファイティングポーズが違うなという、非常にいい経験をさせてもらっているかなと思っています。ただ、僕自身は東北の復興には民間の立場としてかかわることもありますが、復興庁の職員として臨んでいます。その中で2つの震災、阪神・淡路のときの復興のプロセスを追っかけながら、今このタイミングだったらこういう人のこんな話を聞けばいいよとかですね、阪神・淡路だったらこういう経験があるよということをつないだりしています。人を育てるところでできますと、今の今村さんのお話が非常に参考になるなと思ったのは、斜めの関係というのが、すごく大事で、例えば復興というのは、本当に斜め関係が大事だと思うのですね。立場とか年齢とかそういうのを一切抜きにして、いろんな意味で実力勝負といいますか、君、今何できるんだ、というところが常に問われるのです。その中でこんないろんな大人がいるんだ、本気で自分たちのまちのことを考えている人がいるんだ、あるいは大人もこんなに地域のことを一生懸命考えている若いやつらがいるんだ、と、その中で信頼関係が生まれて新しい地域をつくっていくとといいますか、そういう関係が早くできたところから復興も前に進んで行くのだなと、東北で見ている実感して、当時そう思わなかったのですが、阪神・淡路のそういう斜めの関係、いろんなおじさん、おばさんがいて、いろんな若いお兄ちゃん、お姉ちゃんがいて、という様な、多様に交わっていく中で地域がまた新しい一歩を踏み出したなという感想とといいますか、そんな気が今振り返ってみて思いました。ですから、結局その多様な人が出会うということですね。結果的に人を育て、事業を育て、地域を育てていくのかなと。それは例えばいろんな大人と出会い、いろんな若者と出会うことで課題が見えてくる。こんなつらい思いをしている人がここにいるぞということです。例えば本当に当時阪神・淡路のころは外国

人登録者数が150万人で外国人登録をせずに日本に暮らしている人が30万人もいたのです。だから6人に1人は登録がない状態で暮らしていて、本当にひどい状況でしたね。僕らそういう人たちと常に向かいあいながら、いろんな悩みごとを聞きながら、どうやって解決していけばいいのかなと、本当に課題と多く出会うことができたし、逆にいろんな活動をしている人と出会うことで、何かすごいな、こういうふうによればいいんだとモデルですね、目標とといいますか、それとも出会うことができたので、そのいろんな大人の存在と出会うことができる、いろんな課題を知ることができる、そういういろんな斜め関係、そういう場づくりが大事で、私自身もそういう中で育てられてきたなと思いますし、今edg eの中でやってきたことも、そういう多様な斜め関係をつくっていく活動だったのかなというふうには思います。

畑氏 ありがとうございます。今村さん、いかがでしょうか。先ほどの話残したことであわせて結構でございますので。

今村氏 人を育てるという話で、私自身がどういうふうに来てきたのかということで、育っているかどうかということはおき、私自身は、最初すごくできないことがたくさんあって、大学で経営について学んだこともなくて、教育について学んだわけでもなくて、IT関係のプログラミングとかする大学生活だったので、全く分野の違う社会起業家なんて、気づいたときに、そういう呼ばれ方をして取り上げられることが何となく増えて、気づいたらそういうニックネームになっているのかなと思っていたのですが、私自身は、できないことがすごく多かったです。最初それが恥ずかしくて、できないというのがわからないということを実に言えなかったのです。それで、わかったふりをして企業の社長さんと話すときもできるだけわかったようなことを一生懸命言

って回っていた記憶があるのですが、とあるときに、できないことはできないって言ったほうがいいなということをシンプルなのですが気づいて、できる人を連れてきたほうがよっぽど早いということに気づきました。立ち上げ当初はNPOというものに対して、そんなに社会的に認められたものではなかったのですね。うちの親や親せきにとっても何を始めるんだ、という感じだったはずなのです。ですが、ここ最近は何事ごとくビジネスセクターにいらっしゃる方々も興味をもってくれる動きになって来ているのは本当にありがたいと思っていまして、私自身ができないことを一人でやっていると100年かかるところをできる人を集めてできるだけさっさと権限委譲をして私自身も横で学ぶことのほうがすごく自分自身を育てる環境づくりになったなど、組織自体も育ってきたなどということを感じています。なので、人を育てるというよりは、たくさんの人と一緒につくることが大切なのかなと感じています。

畑氏 ありがとうございます。そうしましたら、引き続き、稲村市長、よろしく申し上げます。

稲村氏 尼崎市長の稲村です。どうぞよろしく申し上げます。自己紹介を含めてということだと思いますけれども、私は神戸大学に在学中に阪神・淡路大震災があったということで、大学が長期の休みになりましたし、周りで初めて、それも後からボランティアと呼ばれるようになった活動だと思いますが、避難所にお手伝いに行ったということが自分の大きな原体験になりました。あのときは、社会起業家どころかボランティアそのものが元年と言われて、やっぱりボランティアという言葉自体にも本当に多くの照れくささを伴う時代でした。そして、私自身もまさに先ほど田村さんがおっしゃったような、今まで自分が少しマスコミなんかで見たことないわけではないけれども、実は身近にこんなにたくさんの課題があ

ったのかということを目の当たりにしたり、自分にはできないことをそうやっていろいろやってみて、本当はいろいろなダイナミックな学びの場というのを経験させてもらったということが大きくて、今度は大学が再開したときにこれから震災を知らない世代の後輩が入ってくるタイミングにもこの経験や気づきをどうやって引き継げるかというようなことも含めてボランティアセンターを設立したりというような取り組みをやりました。私自身がそういった中で、何でこのボランティア元年という一方で、それこそさっきの、今でも被災地で行政は何でこんなんや、政府は何でこんなんや、という声がいっぱい上がっているということだったのですけれども、まさに阪神・淡路大震災のときだって、行政だって未曾有の大震災だということで非常にいろんな壁に当たっていたと思いますし、やっぱり私自身そのとき一般の学生であっても何でもうちょっと、まさに今ここで苦しんでいる人たちがこつこつ払ってきた税金を使って何か制度的に支援ができないだろうかとか、大体そもそもこの税金の使い方を決めているのは一体誰なんやということに初めて大きく興味を持ったということも原体験になりまして、いろいろ紆余曲折あった末に政治の世界に足を踏み入れることになりました。それはともかくとして、自分がそうやっていろいろな学びを得るということを支えてくれたものって何やったのかな、と私も思い出しながら、今日もお話をいろいろ伺っていたのですけれども、さっきの課題が身近に見えている、触れることができたということ、また、そこによきモデルになるというか、自分もこんなふうになりたいなと思わせてくれるような先輩や大人がいて、そういう出会いがあったということ、それに加えて、やっぱり自分が失敗するかも知れないけど何かをやってみるといいう、やらせてもらえるという、そういった環境があった、そしてそれは自分自身もちょっと怖いことなのだけれども、そこから何とか逃げずにいっ

てやりきってみるという環境があったということが、避難中の体験やその後の取組みで大きかったかなというのが一点。

もう一点は、私自身が本当に今も政治活動をする上でも原点なのですけれども、ボランティア活動にやっぱり照れくささが伴う、そんな中で私があなた、誰かを助けるっていうのではないのではないか、実は今ここにあるのは、私たちの問題なんじゃないか、そういう問いの立て方ができるようになったときに、非常に私もソーシャルな業界にはまったと思っています。それは、当事者性というと言い過ぎな面もあるかもしれませんが、あれ、おかしいな、これ変じゃない、と思う、感じる、この現状に実は自分も加担しているのではないか、というような気づき、それを変えていくには誰かが何か始めないといけないのではないか、という気づき、実は今あるいろんな問題に自分も無関係ではないのではないか、というこういった気づきも含めての当事者性だと思うのですが、こういったことがいろんな人たちのボタン、少なくとも私はそうだったのかなというふうに思っていて、こういったソーシャルな学びをどう意識していくかというときの一つのポイントかなというふうに思っています。

畑氏 ありがとうございます。そうでしたら、石井部長よろしくお願いします。

石井氏 こんにちは。兵庫県産業労働部長の石井です。私自身、振り返ってみて、いろいろ人生のエピソードといわれるものがどれぐらいあるかなと考えてみました。多分最初は、私が中学生のときに父親を会社の事故で亡くしたというのが、一番大きなスタートだったと思います。そのときに、子どもなりに、これは何か早く仕事を見つけなければ、と思って普通科の高校よりも、高専に行こうと考え、土木工学科を選びました。その思いが現実になったあたりから、本当に中学生で自分の一生の方向を決めてしまっているのかな、と不安

に思いはじめました。先生方からは強い反対をされましたが、何とかお許しを得て普通科に進学し、高校1年生のときに自分がその道に向いているかどうかを確認するために建築現場でアルバイトをしました。親に置き手紙をして、しばらく飯場へ行って来るからと出ていきました。朝早くから荷物をまとめて行ったら、飯場のおじさんが、「それやったらわしが面倒みたる、そのかわり泊まらず通え」と言われて、荷物を持って帰りました。それでも本当にパイプを担いで建築現場も回って自分にこれは本当に向いているのかどうかと考えたときに、これはちょっと違うかもしれない、と感じ、そのときに文化系の活動の中でもまちづくりができることって何だろうか、というふうに思い、そのときに地方行政の道へ行こうと思いました。自分がこの地域を愛して、この地域のために何かやりたいという、そういう思いを強く持ったのは多分このときです。高校1年生の時に「きっと私は地方公務員になる」と、はっきりと意志が固まったと思います。その後、県庁に入って私が一番最初に従事したのは、今日もお話がありましたけれども、障がい者の相談業務です。今で言う知的障がい者更生相談所という所の、ケースワーカーです。いきなりケースワーカーをやりまして、私は一般行政で、法律で入ったのにな、と思いながら、私自身がしんどいのではなくて、逆に相手に悪いなと思ったのです。こんな社会福祉の素人がやっていいのかと思ったのですけれども、そんなこと言っておられません。勉強するしかないのです。それで当時必死に勉強をし、精神薄弱者福祉士という資格ももらいまして、ケースワーカーとして、県下いろいろ巡回もしたりしながら、その障がい者の福祉に関する業務はある程度できるようになってきたと感じるようになった頃、今度は本庁へ行って、総務課の経理係に配属となりました。予算や決算、何ですの、これって感じで。でもそれで県のお金の流れやルールが理解できたことは大きかったです。その次、辞令をもらった時は、文書課の法制係です。私は、係長

というのは法制係長だけしかしたことがなくて、そのかわり、様々な経験をさせてもらいました。そこへ行ったときはちょうど震災を迎えたときで、ここにも書いてありますように、本当に、全国で初めての県民ボランティア活動の促進に関する条例、こういうのを作ったり、平成7年2月に県議会に上程しようと思っていた環境の保全と創造に関する条例を阪神・淡路大震災で一旦ストップして見直し、その前文の中に自然に対する畏敬の念とかの思いを入れたり、あるいは条文として初めて参画と協働という言葉を使ったりしました。県民ボランティア活動の促進等に関する条例も、やはり阪神・淡路大震災で知り得た教訓をきっちり形にしようということで、ボランティアプラザという中核的組織の位置づけですとか、ボランティアに対する、いわゆる公と民の間にあるボランティアなセクター、これを我々は強く進めていくんだという思いをもって、その条文一条一条を一生懸命議論して作ったところです。最近ボランティアプラザの所長代理の高橋さんがボランティア活動の割引制度を全国的に広げるため100万人の署名を得ようということで活動を開始しています。ああいうのを見ていると、あの時生み出したボランティアプラザが、今もずっとこの活動の先陣をきってこの兵庫の地から情報発信ができていくことは非常にうれしく思っています。そういうことに関わったということは非常に幸せに思っています。また、当時は、ずっと震災からの立ち上がり期に個人補償なんて絶対だめだという国の考えだったのです。つまりいろんな災害があって、家が無茶苦茶になってしまっている人たちが立ち上がろうと思ったら、初期にどうしてもお金がいる。だけどそれに対しては、国は個人の補償なんてできないと、そういうことなので、それに対して何とか風穴をあけようということでプロジェクトが組まれて、私もその一員で参加をさせてもらいました。国に対して提案する議案の名前をどうするかということで、被災者生活再建支援法、これでいき

ましようとして私が提案したのです。それがそのままあれよあれよという間に、本当にそのままの名前で法律が固まりまして、それも結果として100万円から300万円ぐらいの範囲ですかね、実質的な個人補償が法的に担保されることになりました。その辺になってくると、私は、この道を選んでよかったな、公務員が今仕事せんでいつすねん、というぐらいの思いをもって仕事に取り組めたというのは非常にうれしく思いました。今日はもう一つすごくうれしく思っているのは、この兵庫県立大学がこういう形で本当に地域全体をキャンパスとしてとらまえて、COCの活動をされている。今日配られています県立大学のパンフレットの8ページを見ますと、当時議論してつくった、「目指す大学像」というのがあります。この中で学長が大きく映っていますが、その右側のほうに「目指す大学像」というのがあって、私が特に思い入れがあるのはこの3つ目の、「世界に開かれ地域とともに発展する夢豊かな大学」という部分です。これは当時、地域貢献をする大学というようなものが、一般的だったのですが、そうじゃない、県立大学は県というすばらしいフィールドがあるから、この県が持っている様々な資源を活用させてもらうことで、県立大学も発展するんだ、そういう思いをどうしても入れたいということで、ちょうどその時私は大学課長をしておりましたので、その思いをこの文章に込めました。それはまさに今学長が進めておられる全県キャンパス構想の推進という形で花開いているなど、それもすごくうれしく思っています。それから、あと私は先ほど感動したのです。今村さんとカタリバのビデオを見て。多分多くの人が心動かされたと思うのですけれども、ああいった思いを持つのは高校生だけではないのだろうと感じます。今、多くの若者が就職をするときになかなか正規の雇用の方がなかったり、あるいは何十社、何百社と受けて全部自分が否定されて就職ができない、そんな中で落ち込んでしまって家庭にこもってしまうニートの人が本当にたくさん出て

きています。多分高校生だけではなくて、今の若者全般に言えること、ひょっとすると既に働いている人の多くもそういうふうな気持ちを持ったことがあるのではないかなという社会情勢になってきていると思っています。私は産業労働部長の立場で、この若者たちにどういうふうに夢を持ってもらおうかな、あるいは先ほど言われていました斜めの関係みたいな、そういう関係を中小企業に勤務した人たちにどうやって持ってもらうかということが大きな課題だと考えています。もうすぐ、予算の記者発表も行われますけれども、やっぱり大事なことは先輩方が声をかけてくれて、県ぐらいの大きな組織になりますと、新規採用職員に対してはきちっと研修があると思います。先輩からの語りがあったり、同期で一緒に苦しみを分かち合えるような、そういうような場があるのですけれども、なかなか中小企業に勤められた人はそういう場がないので、行政がそういった中小企業の皆さんの、特に若者たちの合同研修会を設けて、そこでそういったお互いのつらいこととか、うれしいこととか、そういうことを語り合える研修の場をぜひ設けたいということで、来年度の予算の中には項目として入れました。

それからもう一つ、先ほどのお話の中で、これは兵庫県にも通じるなと思ったのが、大槌町の分です。若者たち、特に大学進学者はとにかく出て行くのが宿命的になってしまっているのが、私が昨年3月まで務めていました但馬県民局です。但馬県民局は、平成17年から平成22年の間、例えば新温泉町ですと、8.3%人口が減ってしまいました。4年制の大学がないものですから、皆若者は一旦地域を出てしまうのです。出ていくにも、何が問題かという、その地域のよさを知らないまま出て行ってしまおうという構図があるのです。それで、就職のことを考えるときには、もう既にふるさとの企業なんて全然知らないですから、大企業、大企業ということで、ふるさとのすばらしい企業の状況をわからないのです。ですから、昨年私が県民局長時代に言ったのは、但馬の若者里

帰り大作戦ということで就職を希望する子じゃなくて、大学に行きたい子も皆含めて、地域の企業だけじゃなくて公務員の取り組み、あるいは僻地勤務している医師の取り組み、そういったものをみんなでわかってもらうような仕掛けをつくって、そうして知った上で出ていってもらう、そういう仕掛けを昨年度の予算の中で実現をしました。やっぱり、地域を愛する、そしてそのために何かしたいという気持ちを持ってもらうというのは先ほど今村さんが言われていましたように、非常に大事なことで、そういうふうなことを思えるような人材育成、そういった形をやっぱり我々公務員として、あるいは親としても、そういうふうに取り組んで行かなければならないのではないかなと思っています。

畑氏 ありがとうございます。お話を聞いていると、結局いろんな出会いがあるということが何となく見えてきました。人、先輩、あるいは課題との出会い。それからモデル、あるいは挑戦できる機会との出会い。そう言いながらも、やりながらの照れくささも感じたりするというわけです。大学が地域で何かやっついこうと思っても、結局その辺はちょっとやっぱり大学も照れくさいわけです。社会貢献なんて今どき何を言っているのという話を、おそらく田村さんからは言われそうな気はします。それでも、それに関わらず出ていくわけですけど、どちらかという今お話を聞いている中では、振り返るというのもあったので、比較的危機的な状況ですね。震災とか災害、リスクの高い、そういう状況の中でどうつながっていくか、どう問題を解決していくか、つまり一番問題が早回しで見える状態になったときにみんなが取り組んだという、ある意味成功体験、あるいはその中での失敗体験だと思うのです。これは、平日の普通の日常生活の中で地域の課題というのを見えなかったり、名前もついてないというふうに今村さんからも言われたりしました。このあたりでまず一つ、一歩歩みを進めて普通の日常の中

で我々はどう取り組んでいくべきなのか、課題にどう向かい合っていくべきなのか、これは大学だけじゃなくて、地域全体、高校生でもそういう取り組みを始めている。それをどうまず見つけ出して考えていくか、そこが一番すごく難しい問題だと思うのですが、何か御提案、お考えがあれば少し御披露いただけたらなと。どなたからでも結構ですから。我こそはという人、石井部長はちょっとだけお休みしておいてください。

今村氏　すごく面白いなと思うことが最近多いのですけども、若い人たちが豊かな日常に飽きていることがあるなと思っています。わざわざNPOだとか、わざわざ東北の被災地にかなりの若者たちが移住して、私もそうですけど、移住してまでそこに来ようという人がすごくたくさんいました。さらに社会とかソーシャルとかいうキーワードがこの世の中でここ最近ちょっとしたマニアックなブームになりつつあるというのは、もしかしたらその見えてきている課題を解決していくということに身を投じたいと思う、若い人たちの一つのブームがそこにあるというのが希望なんじゃないかと思っています。その背景にはやっぱり豊かな日常に飽きてきた、生まれたすぐから豊かだったということに飽きてきているということがあるのではないかと思います。行政の方々が、例えばもっと今このまちの中にある課題を見える化してそこに対するコミットメントを商品化するとか、例えば地域課題の解決に参加するということを観光ツアーにするみたいなものなどが何か最近ちょっといろんなところで聞きますけれども、そういう形で楽しく課題解決にかかわりたいと思う人の気持ちを巻き込んでいけるのも一つのここ最近のあり方で、いい側面なのかなと思っています。

稲村氏　尼崎市の行く末を見透かされたかのような。尼崎市もたくさん課題があるまちなので、例えばその課題に取り組む人であふれ

るまちになればいいじゃないか、ということでこういったソーシャルビジネスの振興ということの一つの柱に据え始めているのですけれども、今日の冒頭、今村さんはいらっしゃってなかったかもしれないですけれども、田村さんが最初に挨拶をされたときに、やっぱりそのいろんなNPOという言葉に手あかがついてきたし、社会起業家と言ったんだ、というような話がありました。今、私はこの立場でソーシャルビジネスというときにも、やっぱりちょっとこだわりというか意図があって、NPOといわずにソーシャルビジネスって株式会社でもNPOでも各法人かどうか活動のスタイルを問わないのだけれども、あえてこう言っているという部分がありまして、さっきも言ったのですけれども、そういう有事の際というのは、当然課題も見えやすい、いろんな人たちとも出会いやすい、非常に展開も早いし、ある種のやはり責任感とか自分自身も高揚感というのがあるので、一定のトライアンドエラーをも含めた体験を一連でやりきれるチャンスが大きいというふうに感じるのです。そういった最初のサイクルが経験できると、それは次に向かうエネルギーの源になるという感じがしてしまっていて、次に少々しんどいときがあっても、いろんな困難があるのだけれども、ここは踏ん張りどころやな、と自分なりにそこを何か飛び越えてもう一歩やりきるという、これはなかなか大変なことなのです。ボランティア元年と言われたときにやっぱりボランティアは好きなときに飽きたら帰るんやろ、無責任な人たちやろ、特に学生としてやっていたら、やっぱりそれはある一面においては事実だったし、すごく悩ましいことでもあったのです。そういった中で、いろんな温度差、いろんなペースでいろんな体験ができたり経験ができるということも大事だったと思うけれど、今日は育成ということがテーマになっていますので、それを言うとやっぱり何か次に向かう一つの最初のサイクルをやりきるということを仕掛けとしては考える価値があるのかなというふうに思うのです。そ

これは今回COC事業で大学ということであれば、そういった大学という仕組みの中でやっぱり学生を最後までしっかりと、途中で折れたりしてしまわないように頑張りきる、失敗もさせてあげる、そういったサイクル、もしくは社会に出てからだとかこういったビジネスといたしますか、一定の責任を負うという中でそういったことにチャレンジをしていくというような枠組みというのが一つ考えられるのかなと思っています。

田村氏 今日は今村さんがいるからかもしれないですけど、斜めというのが一つキーワードであると思っています、斜めの人事異動というか、日本の場合、よくも悪くも雇用の流動性が低くて、1回公務員になったらずっと公務員、会社勤めになったら会社勤め、1回NPOになったら死ぬまでNPOみたいに、非常に硬直をしている。そのことで結局課題には出会わずに済むというか、異動もありますし、ちゃんとサイクルを最後までやりきるということを見ずに済むというか、その問題じゃないかなと思います。僕は阪神・淡路から2年後にこれからNPOだということで、神戸復興塾で、サンフランシスコのNPO視察ツアーに行きました。まちづくりはサンフランシスコでどうしているのかみたいな話をいろんな人に聞いて回って。サンフランシスコ市の当時の都市計画局長さんが日系人の方でとても詳しいです。アメリカは連邦政府がCommunity Development Block Grantというコミュニティ開発のための包括補助金制度というのがあって、結構な額、NPOが得て、マンションを建てて、低所得者向けの住宅施策をしたり、非常にダイナミックで面白かった。その話、非常にサンフランシスコ市の市役所の局長さんがとても詳しいので、何でそんな詳しいんですか、と話をしたら、自分は前職が銀行のコミュニティ融資担当者で、この局長は何年か前に来た、と。その銀行の融資担当の前はハワイでコミュニティ開発のNPOをやっていた、というわけです。

NPOをやっていた人が銀行に行き、かつ行政職員で管理職をやっていると。だから詳しいのは当たり前ですね。その人にしたらキャリアを売っているように見えるのだけど、課題からは逃げていない。貧困だったり、コミュニティ開発ということを一生涯の仕事にされていて、どういう立場に立ったらその課題が解決するのかという中で異動している。もちろん雇用の流動性が高いところは生活が不安定になったりいろいろ課題はあると思いますけど、そのことで解決していくことが多い中、日本の場合を考えると、立場を超えて斜めで異動するということがほぼないので、たまに行政の方が民間に行ったり、そういうことがあるのですけれども、あまり見えてこない。最初、このために残しておこうと思っていたのに船木さんに言われてしまった、イノベーションかアダプテーションという話。社会起業家に求めたいのはイノベーションなのです。今までのやり方とは違うアプローチを求めたいのですけど、流動性が低い、例えば公務員の人はずっと公務員の場と、今までの延長線上で考えてしまう。企業も同じなのです。NPOも一緒です。NPOが解決策を導き出せないのはNPOの今までの流儀でしか物事を考えないからです。もっとダイナミックに違うアプローチをしないといけないのにどうしても延長線上で考える習慣がついているので課題を解決するというまではいかない。制度に乗っかって金をとって来るのはうまいけど、新しい価値を生み出したり本当の課題解決に新しい手法を持ち込むということが、日本はNPOを含めて下手だなと思うのです。それは、まず課題と出会うということ、例えば学生のときにしっかり大学なんかでも提供していただきたい。今、例えば社会起業家になりたいですとか、フェアトレードやりたんですとか、フレームから入る人って結構いて、例えばですよ、フェアトレードやりたいんです、というのは、僕はおかしいと思うのです。このアフリカのこの集落のこの課題を何とかしたいですというのが先にある、いろいろ考えた結果、

こことフェアトレードやるというならわかります。この課題に対して、何とかしたいから手段として社会起業家になりたいですというのはわかるのですが、フレームから入る人が多くて、それは僕たち自身がそうなのですが、やっぱり大学でNPOとかボランティアとかカリキュラムの中に入れ込んだ瞬間にちょっと形骸化してしまうことがあって、もう一回そこはちょっと考え直さないといけないのではないかな、と。しっかり課題と出会って、この課題からは逃げないこと。それで、その中でどんな手法があるんですか、と。今は社会起業家ってアプローチがありかもしれない、さっきも僕、石井さんの話はすごく僕はよかったなと思って、本当にこのまま高専にいていいのだろうか考える高校生ってすごいいいじゃないですか。そういう大学生がいっぱいいて、課題と出会って、こういうアプローチもあるよって、実は大人になってもそう思っている、違ったら、ちょっと違うふうにキャリアフリーにかえられるとか、そういうことになることで初めてイノベーションが生まれる。今までの延長戦ではない、新しい社会をつくるということができるとは思いません。課題と出会うということは、やっぱり必要とされるとか、誰かを必要とするというのは、わかりやすく目の前で展開されることだと思います。さっきVTRで泣いていた子が、必要とされたことがないです、と話していましたけど、被災地というのは、元々ある脆弱性が倍増してあらわれるので、必要とする、される関係が見えやすくなるのです。だから人は、そこに行ってチャレンジしたいと思うわけであって、その課題と出会う、どんな課題から自分は逃げたいのかというように早く発見できるとか、そういうことがすごく大事なのかなと。ちょっとこの10年間私たちが社会起業家というキーワードでやってきたのだけど、あまりフレームから入ってしまうのはよくないのかなと。より課題が見えやすくなって、その課題から逃げないんだ、というような場づくりを地域でやっていく、あるいは大学という

ところでやっていく必要がもっとあるのかなと思います。

稲村氏　　ちょっと脱線するかもしれないですけど、関連で発言してもいいですか。

畑氏　　ちょっとその前に石井部長一応解禁です。

石井氏　　今の田村さんのお話、もっともかなと思います。ただ、その組織に居続ける人間をどうするかというところで、例えば私のように辞令をもらうたびに全然違うところへ行くというのが結構あります。実は私が、但馬に行ったときに、但馬のある映像作家が安藤さんの建物好きで、木の殿堂というのをずっと撮っていて、それがすばらしい作品だったものですから、以前の仕事でつながりのあった安藤先生の事務所に行って直接見てあげてください、と言ったら、お、これええやないか、と。そしたらすみません、安藤忠雄建築研究所ということで後援お願いできますか、と言うと、「わかった、いいで」と言ってくれまして、その作品をワールドメディアコンテストというものに出したら金賞をとりました。元々良い上に、安藤忠雄という人の後援がついたというのが多分重なったということもあったと思うのですけれど、要はいろんなところで交流をした人をつないでいくという役割も行政は異動が激しいだけにできるのかなと感じています。私が今たくらんでいるのは、神戸コレクションみたいな、ああいうところで播州織とか豊岡のかばんとか、そういう地場産品といわれるものの魅力を発信できないかと。実は、あまり知られていないのですが、播州織というのは、その素材はバーバリとかダックスとかそういうところに使われている。ところがそういうことをあまり発信できていないものですから、それならいっそのこと、すごく目立つところにそういった産地をくっつけたり、あるいは異業種との交流を進められない

かと考えています。今日もある意味異業種の交流の一つだと私は思っていますけれど、いろんな方とつないでいくような仕掛けを行政が音頭を取って、作ってみようかということによって来年度そういうことにも力を入れていきたいと思っています。いろんな資源があるのをある人を見るとAというふうにはしか見えないけど、別の人の場合、実はBという見方があるよ、というのが多分いっぱいあると思うのです。だから、その見方、それをお互いいろんな交流をすることによって新しい考え方のヒントが生まれてくる、そういったつながりをつくるということも大事なかなと思っています。

畑氏 ありがとうございます。先ほどからもお話の中で、一番初めには出会いという話をしましたが、今、話を聞いていると、次はつなぐという話が出てきたなというふうに思います。一つはたった今お話にあった斜めのつながり、これを田村さんが見つけてくれました。関係者あるいは動機を持っている人の課題あるいは仕事として、キャリアとしてつないでいくというようなことが一つです。地域の課題と正直向き合う、そのつなぎです。イノベーションにもつなぐというキーワードで考えていくと、一つ面白い方向性が見えてくるかなと。もちろんやるからには、つなぎっ放しではなくて、きちっと最後までやりきる。やりきる上で色々なトライアンドエラーをきちっとやっていこう、経験のサイクルをきちっと回していこうというようなことで、大学の事業に持ち込んでしまうと面白くなくなってしまうのかもしれないですが、そこをどうイノベティブしていくかというところが、私がいただいた課題なのかなと思いました。

じゃあ、稲村市長、どうぞ。転換して大丈夫ですから。

稲村氏 いやいや、ちゃんといい流れで来ているかなと思っていますんですけど、そのアダプテーションとイノベーションという話ですね。また、行

政や企業やソーシャルな業界というような斜めの人事異動の大切さというのは、すごく言われてきたけど実際には難しかった。けども、今はやっぱり時代が進むにつれて、今日のこの場が実現しているということに象徴されるように、相互乗り入れは若干進んできたのかなと思っています。私自身、阪神・淡路のときは行政や政治は何やっただ、とすごく思っていましたし、あの当時、行政とNPOというタイトル、フォーラムみたいなのがやたらはやって、NPOは事業を通じて社会課題を解決しようとしたのだけど、血気盛んだった当時の学生だった私からすると、そもそももっと莫大な資源を持っている行政とカルールメーカーの力を持っているところももっと動かした方がいいのにと生意気な思いがあって、何かもっともつとんがっていいんじゃないか、という思いを正直感じていました。それからときを経て、地方議員をさせていただき、そして今、市長という立場になってみると、これはまたやっぱり違う風景が見えるわけです。逆に、行政の側になってみると、今度はとんがっている人とばっかり出会うので、このとんがっている人は何でもうちよっと一緒にやろうと言ってくれないのだろうか、いろんなことを思うわけです。つくづくいろんな経験から思うのですけれども、アダプテーションとイノベーションは非常に連続性があるということと、これも当たり前のことなのですが、やはり補完関係にもなっているということなのですよね。そういう意味でも、私たちは非常に相互乗り入れが求められていて、自分がやっていることが全体の中のどのあたりのパートなのかと。自分たちの弱みを補っている人はどこでどんなことをやっているのかということ、全体像を知ったり、またその全体像の中でいろんなつながりや、今日、コラボの話もあったと思うんですけど、コラボレーションすること自体でイノベーションにつながっていくと。これ、ビジネスの世界で今非常に強く言われていることなのですが、ソーシャルな業界も同じではないかなということ

をすごく感じています。ですので、やっぱりこういった相互乗り入れということも、今後非常に意識したほうがいいのだろうなと思います。

畑氏 ありがとうございます。いみじくもコラボレーション、田村さんから別々の視点でなくて、それぞれ見える風景は違うのでしょうか、一緒にやっていこうということになってくるかと思えます。今日はe d g eの報告会を見ても、やっぱり、例えばスマイル広場の細見さんの提案というのは基本的に地域から出てきた提案なのですよね。焦点が社会起業家となると、焦点は人にあたりがちですけれども、実はそれは、その人たちの活動を育む地域というのが別にある。その地域の中でどんなコラボレーションの仕組みを設計していくかということが、おそらくまち大学の構想とか、そういう指針をつくられている尼崎市さんにおいては、あるのではないのかなと。まだまだおっしゃりたい部分ではないのかなと思うので、そのあたりちょっと稲村市長からお聞かせいただきたいなと。我々にとってもソーシャルビジネス系という名前をつけて大学の重点地域としてCOC事業のフィールドとして選ばせていただけたのも、実はそのあたりが単に個別の、個の人材を育てるのではなく、地域とともに人材は育つというところが非常に魅力的だったからです。ですので、そのあたり、まだ具体にはどういう形になるのか決まってないのかもしれませんが、少しお考えを御披露いただけたらなと。続けて、おそらくもう時間が押してきましたので、石井部長もきっと具体的にもっとそういう人を応援する、仕掛けのようなもの、予算の話をもっと最初からちらっとしていただきましたけど、お考えではないのかなと思ったりもしています。もし何かあれば、そのあたりをお聞かせいただけたらと思いますので、よろしくお願ひします。

稲村氏 お話をふっていただいたのですけれども、今、尼崎市ではこういうソーシャルビジネ

スを振興していこうということ、そして環境モデル都市、エコ未来都市を目指していこうという産業界との皆さんとの共同の取り組み、そしてもう一つ新しくチャレンジしようとしているのが、まち大学尼崎という企画なのです。これは、正直言いまして、やはり都市部の多くのまちが抱えている課題と思うのですが、やはりコミュニティが希薄になっていく、一方でその公民館なんかの活動も非常に固定化されたメンバーでの活動になってしまって、かつてのように公民、シティズンをここでどンドンと排出していくんだ、という活気があるかというところちょっと心もとないというような現状があります。そういった中で、まさに尼崎もユニバーシティがないのですよ。45万のまちなのですが、だったら街中キャンパスにしてしまったらいいじゃないか、というふうに思っております。街中がキャンパス、誰でも先生、誰でも生徒というふうに銘打つ予定で、まだ企画段階なのですけれども、いろんな取り組みができないかなと思っております。その中ではやっぱり、自分がもう少しここ専門的に学びたい、学んだことを実践につなげたい、そしてそこでいろんな人たちと出会いたいというような、そういったことをどンドンつなげる企画として構想していまして、今まで取り組んでいることがこういったフレームの中でうまく有機的につながるといいなということは今イメージしています。ですから尼崎は産業都市でもあるのですけれども、コミュニティだけではなく事業者の皆さんですね、企業の皆さんともいろいろコラボレーションができるのではないかなと思っております。

畑氏 次は企業の人と一緒に並んでパネルをしたいと思っております。

石井氏 兵庫県では、今年度、ひょうご経済・雇用活性化プランというものを作っております。この4月からそれをスタートさせようとしています。その中に一つ兵庫らしい項目として日本の縮

図である兵庫だから生活関連事業を展開する一つの先道的な地位に立ち得るという思いを持っている部分があります。と言いますのは、先ほど稲村さんからお話がありましたように、僻地を抱える、多くの都心部も持っている、まさに日本の縮図ですので、いろんなニーズが真っ先に全国の中で出てきますし、事件も起こっていると。これは阪神・淡路大震災がそれに当たるかどうか別に、要するにいろんなことに対応していかざるを得ないという場面が起こりやすい。これはいわゆるビジネスチャンスであり、ひょっとするとソーシャルビジネスチャンスでもあるのかもわかりません。そういうことから、やはり新しいことにチャレンジしようとする起業家の皆さんをきちっと応援をしていこうということで、兵庫チャレンジ起業支援貸付、無利子貸付制度をもったり、あるいは女性、あるいはシニア企業家が、その起業するときの2分の1補助をしようとか、高齢者のコミュニティビジネスの離陸応援事業、これに対する補助をしようといった形でさまざまな起業家支援を予算化していこうとしています。それ以外にも一般的な事業活動の融資制度として中小企業の制度融資もしておりまして、非常に低利で融資を受けられると、そういったことがあります。それから、やはり今日もテーマとして出てきました、継続をするということに関してどうすれば、起業したものが続けられるのかということについては知恵の発揮のしどころかなというのはあります。できるだけ新しいニーズを早く見い出して、本当に社会が支持してくれるような形の起業へとつないでいただきたいという思いを持っています。

畑氏 ありがとうございます。これで大体の議論はできたかなと一応は思っているのですが、このCOC事業というのは大学が地域とどう結びつくかということが一番大きなテーマでもあります。センターオブコミュニティと書いてあるのですが、大学が地域の中心、そうじゃなくて実は

大学も地域の中心というのが皆さんの話の中でよく見えて来たかなと思っています。実際に大学で非常勤講師をされたりとか、あるいは大学がないところでリーダーを育てる、人を育てるという活動をしている今村さん、あるいは地域全体を大学にして、その中で問題解決をしていく人材を育てようとしている尼崎でのチャレンジ。兵庫県は県立大学とともにということもあるのですが、起業家をより広く、地域の中で活動できるような、ここだけじゃなくて全県でそういう活動が盛んになっていくような取り組みということをなさっていく、ということだと思っています。そういう意味では我々の事業に対するステイクホルダーでもありますし、ともにコラボレーションする仲間というようではないかというふうに思っています。そういう展開を大学に対して何かの機会あるいは苦言をここで一発呈しておこうというのでもいいかもしれません。そのあたり一言ずついただけたらと思います。

田村氏 はい、ありがとうございます。私は、ほかの大学ですけれど、兵庫県の甲南女子大と関西学院大学で非常勤をやっています。甲南女子大学14年教えていますけれども、さっき言ったフレームワークから入ることの反省というのがあって、現場に行かないといけない、課題を知らないといけないという思いが本当強いんです。別に苦言というわけじゃないですけども、やっぱりその現場に行く、課題と向き合う機会をたくさんつくることが重要かなと思っています。私はポートアイランドでチャイルド・ケモ・ハウスという小児がんの専門施設、日本で初めての施設が去年できまして、今クリニックのほうオープンして、19の部屋とクリニックの併設施設ということで医療クラスターの中に皆でつくったのです。つくってみましたら、いろんな人が見学に来てくれるのです。これ自体がまさにアダプテーションじゃなくてイノベーションで、なかなか公的な支援が受けられないので寄付を中心に回してい

ましようということ。皆さん今日帰りにぜひ1万円ずつ寄附をいただければ大変ありがたいなと思うところなのですが、そこで気づくことは、今日の3つ発表もそうなのです、細見さんが亡くなる時はどうするのかという話だし、小笠原さんも松岡さんの健康とか障がいがある人たちがどう生きるのか、尊厳のある死に方とか尊厳のある生き方というのをこれから問われると思うのです。僕らは、私自身が長男を小児がんで亡くしまして、こういう課題に気づいたのですが、それまで全く僕自身は健康だし、いまだに入院もしたことがなかったから、そんな課題があるなんて思っても見なかった。ただ、いざ当事者になって見たら何てこんなひどい空間があるのかと気づいてやってみたわけです。これは子どもの病気とその家族のためにと思ってやってきたら、田村さんでもね、大人のがんも大変なのです、という話を聞いたり、小児がん以外の障がいを持つお子さん、障がいのあるお子さんを持つ家族から、そんな言わんとほかのハウスも建ててください、と言われてたり、やってみると、ほかの本当にその尊厳のある生き方とか死に方で悩みもがき苦しんでいる人たちとたくさん出会うわけですね。現場に出て課題と出会うとまたいろんな課題が次々と明らかになっていく、そんな中でこそいろんなスキームが生きてくると思うのです。社会起業家というアプローチだったりコミュニティビジネスでのアプローチだったり。こういう課題にこういう切り込み方をしたら、こんなにいいモデルができるんだ、そういう動きに生きてくると思うのですね。ですから、ぜひ現場に出かけて課題とたくさん出会えるような機会をたくさんつくっていただきたいのと、もう一つだけ言いますと2番目に今日プレゼンされた小笠原さんも34歳で大学院に行っていますという話。僕も実は兵庫県立高校卒業後社会に出ましたので大学には行ってないのですが、大人になってから大学院に行きまして、さっきそのキャリアをとるのが難しいという話があったのですけれども、社会人で大学院に行く

ということは課題と出会って、今度手法が見つからないときの非常に有効な手段じゃないかなと思うのです。ですから兵庫県中に大学院があるというのはこんなにすばらしいことはないわけであって、そこと一見カリキュラムは社会的企業家とかソーシャルビジネス関係がないような学科、大学院のコースであっても、ぜひそこに来た社会人の方、何らかの社会課題を解決したいと思って大学院に来る人っていうのも多分多いと思いますから、そういう人たちにもぜひこういうテーマ、うまく投げかけていただいて、つないでもらって、兵庫県中のいろんなところから熱意のある大人がもう一回大学院に行って課題解決にどんどんチャレンジして飛び込んでいくような、そんな流れをつくってもらえたらいいなと思います。ありがとうございます。

畑氏　　ちょっとだけ早回しをお願いします。

今村氏　　あまちゃんが好きだったのですが、あまちゃんにあったシーンで、あきちゃんという子がいて、ばあちゃんに海で泳げと言われるときに泳げるの、私、海なんかで泳げるのってことを言ったときにおばあちゃんが突き落とってしまうというシーンがあったのです。海に突き落とされたあきは泳ぐしかなくて、何とか、あっぷあっぷしながらそこで結構楽しいということに気づくという名シーンがあったのですけれども、例えば大学ももっと早い段階でほとんどの大学生は高校を卒業する段階で別にどうしてもこれが学びたくてこの大学に入りましたという人はほとんどいませんので、偏差値これぐらいだからここ行くというのが実態なので、早い段階で学生たちを社会課題の現場に突き落として、まずやってみろということを言う勇気を持ったカリキュラム構成をされてはどうかと思っています。そうすれば、確実にできないとか、これは大変だ、知ること知らなければ、もっと学ばなきゃという気分になって、きっと学生はその後たくさん大学で学

ぼうという状態になりますので、まずやらせてみた上で大学が抱え込むのではなくて学生に、まず現場に突き落とす機会をつくって、大学で理論的なことをその後学ばせるというような順番にするともっとよくなるのではないかと思います。

畑氏 ありがとうございます。

稲村氏 そうは言いましても、地域に預けたら立派になって帰ってくるような、そんな甘いものではありませんので、これは行政の職員や大学より手前の教育関係者にも同じことが言えるのかもしれませんが、先生も一緒に出てください。先生も一緒に地域で悩み、考え、そして自分のこれまでの教えと結びつくということをする、これは行政職員もそうなのですけれども、それが相互乗り入れということかなと思っています。一緒に頑張りましょう。

石井氏 だんだん厳しい言葉になっていますが、さらに言いますと、大学の先生方はそういう人たちが有名になってきたり、話題性が高まってくると近くに寄ってきて一緒にこんなんしましよるか、という話になります。しかし、全然人通りのない商店街、これを私の研究フィールドとして、もっと賑やかにしてやろうか、と言って、本気で取り組んでくれるような先生がどんどん出てきてくれて、一緒にリスクをとってくれるようになれば良いなと思っています。県立大学であればこそ、今は、工学とか理学の理系の先生方が産学連携で花開いていることは多いと思いますけれども、そのほか経済・経営関係などでやはり我々の弱っているところに、それを一緒に解決する、そのかわり多少、この先生がやってもあかんかった、というのは目をつむってもらえるような、おらかな風土をつくって長期的に関わろうという、そういうパワーをぜひとも兵庫県立大学に求めます。

畑氏 ありがとうございます。求めた以上は一緒にやるというのがお決まりですので、今日からの皆さん方は兵庫県立大学のCOC事業の顧問であると、私は接していかせていただきますので。あえてはまとめませんけれども、これから、他のフィールドも含めて、人材を育てるとというのがCOC事業のテーマになっております。ですので、拙いよちよち歩きで大学の教員も学生も地域に出ていくことになろうかと思いますが、そこは温かく見守って応援して、ときには後ろから蹴りを入れていただくことも必要かもしれませんけれども、一緒に地域課題に出会って最後までやりきりたいと思っていますので、御協力御支援をよろしくお願いします。

時間いっぱいちょっと伸びてしまいました。パネラーの皆さんに感謝の意を表して拍手をお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。